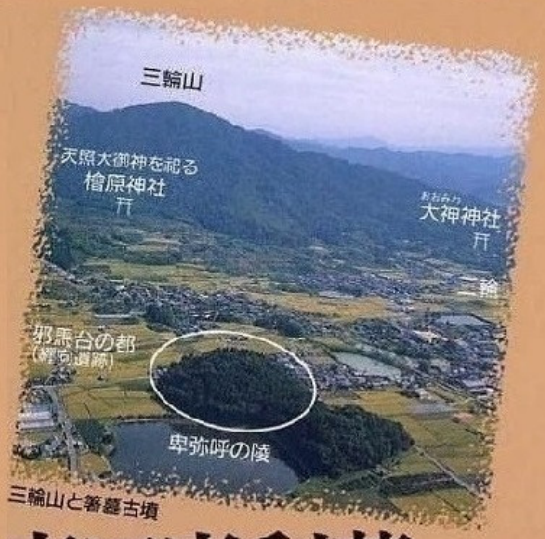
やまと

邪馬台 三国志

歴史物語のあらすじ



神武は大和朝廷の開祖
天照大御神は卑弥呼

高田康利著

邪馬台国史が見えた **邪馬台国時代の歴史を物語に**

中国の三国志、日本の戦国時代・幕末をはるかに凌駕する世界に誇れる歴史です。

前五世紀から倭国大乱まで、那珂つ国と天之国、オロチ厳之国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が立て続けに興った。

二世紀後半、伊弉諾の御世、畿内勢が謀反して大乱が勃発した。倭奴国王朝は瓦解し、日向に天照大御神（日神）を仰ぐ高天、大倭に天照大神（日神の婿養子）率いる邪馬台国に分裂した。

二二〇年代、日神は大倭に遷座して、倭の女王ヒミコに共立された。

三世紀後半、日向から東征した磐余彦（神武）が火明饒速日（火瓊瓊杵の児、海幸彦）の建てた日本朝を倒し、橿原に大和朝廷を開いた。

王朝の変遷

Ⅰ **那珂つ国**＝五帝期黄帝の一門（地の神）＋后土の国（黄泉国）　→福岡平野に都す……前二十四世紀～

Ⅱ **那珂つ国**＋**天之国**（太伯・呉王夫差の子孫、天（太陽）や日の神を崇拝）、天地……前五世紀中頃
　→福岡平野の那珂川流域に都す

Ⅲ **厳之国王朝**＝夏后帝小康庶子・越王句践の子孫、越オロチ族→福岡平野に都す　……前四世紀後半
　厳之国本家の宗像家→一門を各地に策封→吉野ヶ里（伊都国）、吉備（？）、出雲（佐太国）、摂津（小千族）、奈良盆地（三輪オロチ、三輪氏）、北陸（越オロチ、越智氏）　那珂つ国を中つ国と改名させ、出雲に追放

Ⅳ **倭国王朝**＝天（厳）之国＋日高国（韓一門）、高天　→唐津湾岸／福岡平野に都す……前二二〇年頃

Ⅴ **豊葦原中つ国王朝**＝豊国（漢一門）＋葦原家（厳之国一門）＋中つ国　……前二世紀後半
　→福岡平野の早良／春日に都す。厳之国本家の宗像家→宗家に祭り上げられ、玄海・宗像に閉居

Ⅵ **伊都国王朝**＝吉野ヶ里のオロチ族＋大倭家　……前一世紀中頃
　→吉野ヶ里から福岡平野の春日や糸島平野怡土に乗り込み、怡土に都す。豊葦原中つ国を出雲に追放

Ⅶ **倭奴国王朝**＝倭（高天）＋豊葦原中つ国＋宗像家、天地→怡土に天宮（天上の都）す……一世紀前半
　倭国大乱→皇太神が謀反し、邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝）を樹立→倭奴国王朝分裂……一八〇年代中頃
　副都オロチ勢・豊葦原瑞穂国　倭・日限・大山祇神ら中つ国勢　豊葦原中つ国

邪馬台	厳之国王朝（唐古）	高天	天之国王朝（高千穂宮）	出雲	素戔嗚→豊葦原中つ国建て直しに失敗
	天（厳）之国王朝（上之宮）	日限	日前、妻国、投馬、狗奴		大己貴（素戔嗚の児）→葦原中つ国再建
	日本王朝（珠城宮）	熊襲	和王朝（高千穂宮）		

幾内　日向・熊襲　出雲

神武（和王磐余彦）東征　……二八五～二九〇年代末

Ⅷ **大和朝廷**　和国が大倭国と共立した大和家に豊葦原中つ国・厳之国等を併合　……三〇一年
　物部氏＝軍事筆頭の重臣に抜擢された火明饒速日の児・可美真手が、布都御魂剣を賜り、朝廷を守護

大和朝廷の成り立ち

『史記』断髪文身した呉の太伯ら子孫→呉王夫差一族…周の伝統を継承し、天（日）を崇拝
→前五世紀初め、江東から渡来して天之国建国……倭国王朝……邪馬台国
『史記』晋分家の韓一族→半島から渡来して日高国建国　：　高天　……倭奴国王朝……日神の高天
『史記』・「倭人伝」会稽に移封された夏后帝小康庶子　天（厳）之国　天地
→越王句践末裔→前四世紀、江南から渡来　高天→①大倭に倭国王朝共立
→オロチ厳之国王朝一派の水穂厳之国　……豊葦原中つ国……②火瓊瓊杵が熊襲に日前建国
……火火出見・磐余彦の和国
オロチ厳之国宗家の宗像家……神武の大和朝廷
※断髪文身した越王句践末裔…越の伝統を継承し、蛇神崇拝→前四世紀、江南から渡来→オロチ厳之国王朝樹立
→豊葦原中つ国王朝→伊都国王朝→邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝→天（厳）之国王朝→日本王朝に発展）

前二三世紀？　前五世紀前半　前四世紀後半　前三世紀後半
那珂つ国／天之国→　オロチ厳之国王朝→倭国王朝（高天、天之国が日高と組み、王朝樹立）
前二世紀後半　前一世紀中頃　一世紀前半
→豊葦原中つ国王朝→伊都国王朝→倭奴国王朝（天地、倭国が豊葦原中つ国と組み、王朝再興）
（吉野ヶ里の厳分家）

一八〇年代中頃、一九〇年前後～　二二〇年代前半　二八〇年代前半
倭国大乱　天宮高千穂宮の高天　→　熊襲に天降った日隈・日前　→和国（いずれも古の倭奴国）
→王朝分裂　皇太神（→天照大神）が樹立　日神（→倭の女王ヒミコ）　梅幸彦（→火明饒速日）
幾内邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝→天（厳）之国王朝（＝倭国）→日本（やまと）王朝）
出雲の葦原中つ国／奈良盆地の大日本（大倭）国
二八〇年代中頃～　二九〇年代末　三〇一年
→和王磐余彦（神武）東征→和国が天下統一し、大和朝廷樹立（和国が大倭国と組み、倭（奴）国王朝再興）
『旧唐書』「倭国日本伝」、「倭国は古の倭奴国なり。・・その王、姓は阿毎（あめ、天）氏なり」、
「日本国は倭国の別種なり」、「日本は旧小国、倭国の地を併せたり」

◇倭国／倭奴国の国のかたち

倭国王朝＝天（厳）之国＋日高国（戦国七雄・韓の一門）＝高天　前二二〇年頃成立

- 倭国王朝　高天
  - 天（厳）
    - 天
      - 天（日）日の神……北方系銅鏡
      - 天（水）水の神……鉄剣・鉄刀
    - 厳
      - 厳（火）火の神……弓矢・鏃
      - 厳（水）水の神……銅剣
    - 水穂国
  - 日高
    - 日隈（熊野家）……日隈神宝〔日鏡・玉三つ・熊の神籬など＋瓊矛〕

〔国の祭器〕
太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀
〔上古の祭器〕那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他
『晋書』や『魏略』逸文、「（倭人は）太伯の末裔と自ら言う」

倭奴国王朝＝倭＋豊葦原中つ国＝天地　倭国＝天（厳）之国＋日高＝高天　一世紀前半成立

- 倭奴国王朝　天地
  - 倭　高天
    - 天（厳）
      - 天
        - 天（日）：北方系銅鏡（方格規矩鏡）
        - 天（水）：鉄剣・鉄刀（布都斯魂の十握剣）
      - 厳
        - 厳（火）：弓矢・鏃
        - 厳（水）：銅剣
      - 水穂国
    - 日高
    - 日隈（熊野家）……瓊矛・日鏡など日隈（熊野家）神宝
  - 豊葦原中つ国（豊国＝火神、葦原家＝厳分家、中つ国＝地の神）：弓矢・玉類

初代天神の女帝＝天常立
初代倭王＝女帝の入り婿
豊葦原中つ国王・国常立

〔国の祭器〕
奴国＝中つ国、后土国　闇見国＝月読国、月夜見国、夜見国、黄泉国、鬼国
太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀
〔上古の祭器〕那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他

本書の王系譜

大乱後の倭奴国王朝（天地）→高天（倭）、豊葦原中つ国（奴国）、邪馬台国、大倭家に分裂

◇伊弉諾夫妻の実子　伊弉諾の主な養子と人質、伊弉冉分身、伊弉冉の主な養女

……（人質）少童（海神）三神、筒男（住吉）三神、海神本家筋宗女、大山祇家宗女、闇龗ら

……（主家嫡子の帝王教育）向津姫（天照大御神→ヒミコ）、天照皇太神（→天照大神）、素戔嗚ら

（実子）日子（蛭児→蛭子、天事代主）、火軻遇突智（→火産霊）

（養女）大宜都比売、丹生都比売の埴山姫（→大宜都比売襲名→大気津比売→埴山姫）、罔象女

（伊弉冉分身）白山神、菊理媛　／稚産霊（豊受姫の母、日神分身稚日女→丹生都比売襲名）ら

倭国大乱と瑞穂の邪馬台国勃興

大乱勃発時の戦場→神戸市東部　決戦場→島根半島の黄泉国

伊弉諾は、妃が東軍八柱雷軍に石屋邑か六甲山上に連れ去られたと聞くや、救出作戦を敢行した。

東軍の女大将瀬織津姫（天照大神妃）が広田国に、住吉川以西に住吉大神、河内国魂、八柱雷、埴山姫が布陣する中、西軍が敏馬浦に奇襲上陸して妃の救出を図る一方、裏切り者の埴山姫（丹生都比売）を捕まえる作戦だ。万一、妃が石屋邑にいない時は、女大将菊理媛（伊弉冉分身）率いる高志国白山のオロチ精鋭が六甲山に駆け登って妃を救出した後、広田国に攻め入り、瀬織津姫を生け捕る大作戦だ。

これに沿って、罔象女・稚産霊・大宜都比売が敏馬浦に奇襲上陸して、稚産霊が生田の森に展開し、副将大宜津比売は埴山姫を追いかけ回した。結果は菊理媛が敵に捕まり、やむなく全軍は退却した。

その後、伊弉諾は妃と菊理媛が闇見国に拉致されたと知るや、そこで決戦に及んだが大敗して潰走し、北九州の都を蹂躙されて日向に走った。こうして大倭に邪馬台国が興り、大蛇の天照大神・天羽羽親子が水火（瑞穂）の天神に昇った。

★伊弉冉、瀬織津姫（ヒミコの分身、天照大御神荒魂に転身）、菊理媛、大宜都比売、埴山姫（大気津比売襲名）、稚産霊（稚日女、丹生都比売に転身）、罔象女（菊理媛以下、伊弉冉養女）は、その後、どう生き抜いたのか。物語中で、そのつど仔細に綴っておいた。

★二九〇年代、神功は当地に侵攻して苦戦すると、天照大御神ら神々に神託を請うた。

これが廣田・生田・本住吉神社の創祀につながった。言い換えると、大乱勃発時の陣形が今日まで、再現・保存されてきたわけだ。

西軍（倭奴国王新方の伊弉諾軍）
①罔象女　②④大宜都比売
③稚産霊　⑤伊弉諾本軍
⑥菊理媛

東軍（邪馬台国軍）
①瀬織津姫　②住吉大神
③河内国魂　④埴山姫
⑤八柱雷（八岐大蛇）

東西の女大将

闇見国＝伊弉冉母国の月読国、月夜見国
夜見の黄泉（こうせん）国、黄泉（よみ）国

黄泉国の天下分け目の決戦場

本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕

◇『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ

縄文中期、五帝期黄帝につながる東の天帝の児が北九州に渡来して、在郷の海神（わたつみ）大神、鰐族、熊族らの上に立ち、玉八つ（死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細玉、羽太・足高・赤石の玉）、熊の神籬など玉つ宝十種（とくさ）で以て、地の神を称える那珂（なか）つ国を那珂川中流域（福岡市）に建国した。

黄帝流の祭政を至上と見る彼は、九州を隈なく支配するや、仁徳・慈愛を謳いつつ東西南北四方に忠臣四カ国を配置して、神仙の国（神国）づくりに励んできた。その四カ国は、后土末裔と自負して玄界灘沿いに割拠し、暦作りや葬送儀礼を司る闇見（くらみ）国（黄泉（こうせん）国）、地の神を祀って黄帝一門と称する国東の杵築国、炎帝（神農氏）子孫と語る南国の火の国と配下熊族（熊襲）、筑紫平野以西に展開する海神大神だった。

ついで前五世紀前半、呉の太伯（周大王古公亶父の嫡子、姫氏）・呉王夫差ら子孫が九州西北に渡来して、日鏡（ひのかがみ）・奥つ鏡・辺（へ）つ鏡で以て天（日、太陽）を称える天之（あめの）国を興し、水田稲作を始めた。両者は天地と銘打って手を携えながら、摂津六甲山南麓、奈良盆地、琵琶湖南部に進出した。

前四世紀後半、夏后帝少康庶子・越王句践につながる越のオロチ族が薩摩半島に大挙襲来して福岡平野の那珂つ国に襲いかかり、蛇神を崇めるオロチ厳（いつの）之国王朝を開くや、板付辺り（博多区）に都した。

敗れた那珂つ国勢は、闇見国・杵築国ともども辺境の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。

一方の天之国は、オロチ族傘下に組み込まれ、越流米づくりを強いられた。

その後の厳之国王朝は、鰐族・山祇族・三嶋族らを従える海神大神と手を組み、瑞宝十種を天璽に奉る厳之国本家、宗像家を共立するや、北陸南部や尾張平野に進出して水田稲作を押し進めたが、それ以東では縄文勢と小競り合いを繰り返すばかりで、一歩も前進できなかった。

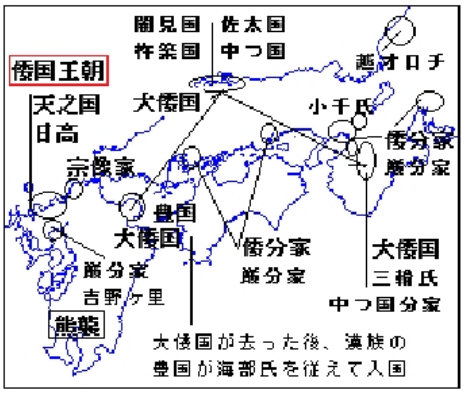
その瑞宝十種は、死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、オロチ軍団を統率する八握の銅剣（細形銅剣）、オロチ船団を指揮する際の蛇の領巾などだった。この内の玉五つは那珂つ国から奪った玉器、鏡二面は天之国からもぎ取った神鏡だ。

秦が天下統一した前三世紀後半、天之国は半島から流れ来た韓系日高国と組んで厳之国王朝を倒すと、倭国（日高＋天之国、高天）王朝と銘打ち、尾張平野まで進出したが、それ以東は縄文勢や越オロチ勢に阻まれた。この間に、厳之国分家が火神を奉る炎帝一門を担いで厳（火、水）之国を建て、倭国にすり寄ってきた。

この国のかたちこそ、水穂（水火、みずほ）国であり、国の目指すところも「水田稲作に勤しむ国」だった。倭国はこの勢力を挙って抱え込んだ結果、天（厳）之国とも呼ばれた。

その後、天（厳）之国（倭国）と日高は共通の分家、日隈（熊野家）を共立して、倭王警護や熊本平野以南の統治・開拓を背負わせてきた。その上で、これら三家による支配体制に切り替えた。

熊本平野に移封された日隈は、熊襲が代々の祖霊を祭ってきた神



宝、即ち日鏡・玉三つ（羽太・足高・赤石の玉）・熊の神籬などを召し上げ、日隈（熊野家）神宝として奉ってきた。ちなみに、日鏡は熊襲が天之国から奪った神鏡、玉三つは熊襲が那珂つ国から取り上げた玉器、熊の神籬は那珂つ国から取り戻した神宝だ。

ついで倭は太氏と共に銅鐸で先祖を祀る大倭（おおやまと）家を建て、筑紫島東の国東に策封した。その後、大倭家は出雲に移封された。そのまた後、倭国が摂津安満（高槻市）に開いた副都を奈良盆地に進めた折、副都の政一切合切を取り仕切る家柄に抜擢された。それ故、奈良盆地は大倭国と呼ばれ、その分家は東海一円に広がった。銅鐸が東海地方から多々出てくるのは、これがためだ。

前二世紀前半、漢朝内部で跡目争いが起こり、これに関わった漢の王族が倭に流れて来た。時の倭王は国東に豊（とよ）なる王家を興すと、在郷の中つ国勢、海神一門に分散する鰐族・海部（あまべ）家らを配下として分け与えた。この経緯から、豊国は漢の高祖にあやかり、亀や火神を尊んできた。

後世、丹後や尾張に移封されて大躍進した海部家は、この時の恩義に深く感じ入ったのか、豊系火神や鰐族長を担ぎ続けたり、世々丁重にもてなすなどしてきた。

これら倭三家、大倭家、豊国に君臨する倭王は、日高と天（厳）から交互に選ばれた。両家が倭王を出せない事態に陥ると、豊国または日隈の皇子が本家に養子入りして、倭王に立つとされた。時の倭王は祭政の大事が生じた際には、日高と天（厳）の重臣らを神殿近くの原っぱ、高天の原〔高は日高、天は天之国や天（厳）之国の意〕に招集して得心の行くまで協議させてきた。

その当時から、日の神を祀る祭場では、倭王は祭壇正面の玉座（日前）に、日高王は倭王左の心もち高い座（日高）に、天（厳）王は玉座背後の正面（日向）に、豊国王は倭王右に座をとった。日隈王は最後列の片隅（日隅）に畏って控えてきた。それ故、日隈は熊野家とも呼ばれた。

次に、豊葦原中つ国王朝（豊国＋厳分家の葦原家＋中つ国）が興った。王朝建国の立役者天叢雲（あめのむらくも）

は、宗像本家を宗家に祭り上げて瑞宝十種を奪うや、八握剣を天叢雲剣と改名して天璽に奉った。

前一世紀中頃、吉野ヶ里の厳分家が糸島平野怡土に進出して豊葦原中つ国王朝を倒し、新王朝を開いた。この王朝創始者も天叢雲と語り、新たに鋳た有柄銅剣を天叢雲剣と命名して天璽に奉った。

前一世紀後半、王朝は久方ぶりに漢に向けて使者を送った。その際、漢から数多の内行花文鏡を授かった上に、伊都国としての認証も賜った。

使者の帰国後、天叢雲は漢帝から賜った神鏡を天璽同然に奉る一方、径四十数センチメートルの内行花文鏡を数多鋳造して、見せびらかしてきた。

この王朝こそ、「倭人伝」に記された伊都国なのだ。

紀元前後になると、天之国は宗像家を外戚に迎えた結果、再度勢力を盛り返してきた。この時期の伊都国王朝は、儒教による政治や神国づくりをごちゃ混ぜにして世情を混乱させたことで、国の行く末や施策をめぐり、天之国と事あるごとに対立した。その結果、王朝方は天之国の宗女だった幼少の姫君を天神に担がされる羽目に陥った。

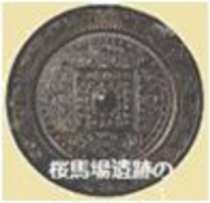
☆二五年、武帝末裔の劉秀が（後）漢朝を再興して洛陽に都した。

一世紀前半、日の神を称える天之国女帝が地の神を祀る豊葦原中つ国の祖、厳香具土と盟約して伊都国に競り勝ち、これを古巣の吉野ヶ里に押し戻すや、倭奴国王朝（天地）を糸島平野井原に樹立した。この立役者こそ、伊都国王朝の天神に坐していた天常立だった。

『日本書紀』、「天地初めて判るるときに、物有り。葦牙の若くして空の中に生れり。此に因りて化る神を天常立尊と号す。又物有り。浮膏の若くして空の中に生れり。国常立尊と号す」

天常立は初代女系天神に昇って怡土井原に天宮するや、豊葦原中つ国王を婿に迎えて国常立と呼び、王朝の政一切を取り仕切る倭王に持ち上げた。

それと同時に、天地を具現した方格規矩鏡を天璽として奉ってきた。さらに日高王高皇産霊に布都斯魂の十握剣（布都斯魂剣）を託して王朝守護を命じる一方、日隈王に瓊矛など日隈神宝を授けて自身の身辺警護とともに熊襲の統治や開拓も背負わせてきた



方格規矩鏡

五七年、倭奴国王の使節が漢に朝貢して光武帝劉秀に見え、金印「漢委奴国王」等を賜った。

『後漢書』、「建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝貢す。・・光武、賜うに印綬を以ってす」

百年後の一七〇年代初め、天竺由来の常世願望がにわかに高まった。このとき、日隈の伊弉諾が日の神を末代まで親衛する家訓や伝統をかなぐり捨てて、何処から聞き及んだのか、常世づくりがすぐに実現できるかの如く言いふらし始めた。彼の説くところは、こうだった。

「天竺では、仏法の下で常世づくりに奮闘した結果、クシャン朝など周辺諸国も大いに繁栄した。我らもこれに見習うべきだ。天竺においては生死が繰り返す中で、人間は前世の行為によって、予め生まれ育つ氏族や身分が決められているという。

支配者として誕生する日神は、天界に住みながら天上の神々を治める一方、地上の政を取り計らい、夜明けになると人々を仕事につかせ、死者が出れば魂を天に導き、然る後に地上に送り届けて蘇生させる、とのことだ。

先ずは、天竺の国体をしかと支えてきた身分制度、すなわち日の天神を頂点として月神、火神・

風神・雷神と続く天竺流序列制を採用して、然る後に常世づくりに取りかかってみてはどうか」

その結果、伊弉諾の狙い通りに物事がとんとん拍子に運んだ。巷の庶民らは、この真新しい来世観に飛びついたり、ベタ褒めするなどして熱狂的賛同者に変貌していった。

その後も支持者を増やした彼は、黄帝流神国づくりや常世観を織り交ぜた国づくり策をぶち上げ、さも実現するかのごとく言いふらしてきた。それが六代女系天神天之尾羽張の興味をそそった結果、彼は七代倭王に抜擢されて神璽の瓊矛など日隈神宝、布都斯魂の十握剣を共に賜った。

その際、以下の詔と共に天神宗女向津姫や素戔嗚の帝王教育、宗像家三皇女の養育も託された。

「先ずは向津姫を若日女に奉って共に国中を駆け巡り、東方の統治をしかと固めよ。姫が成人した暁には、日隈から熊野櫛御気野を婿に迎えると同時に、姫を天之国の天照大神に、次に日の天神に祭り上げるとしよう。さすれば、王朝草創期と似て非なる国体が成って、皆の衆は心を一つにして王朝繁栄に打ち込める」

『日本書紀』、「天神、伊弉諾尊・伊弉冉尊に謂りて曰わく、『豊葦原の千五百秋の瑞穂の地あり。汝往きて脩すべし』とのたまいて、すなわち天瓊矛を賜う」

宗像家宗女の田心姫が妃伊弉冉に養女入りする際、瑞宝を所持してきたのは、言うまでもない。その後の伊弉諾は、次第に横暴になった。敵愾心を隠し持つ筑紫島の厳（水）勢に対して、祭器の銅剣を片っ端から没収して出雲・吉備・四国に追いやった。そして、その跡釜に日隈勢を続々と送り込んだ。その結果、北九州の地は日隈勢の溢れる所となり、後世に銅矛文化圏と呼ばれた。

ここに至る前から、伊弉諾・伊弉冉夫妻は家族同然に暮らす数多の皇子や姫君に恵まれていた。

「記紀」や伊勢神道によると、太氏や大倭家が海神と共立した大綿津見（大海神）、住吉神、大山

祇、金山彦、菊理媛、埴山姫、大宜都姫、稚産霊（豊葦原中つ国中興の祖・厳香来雷の娘）、罔象女、甕速日（稜威雄走の児、武甕槌の祖父）、武甕槌男（伊都之尾羽張のひ孫、磐筒男の児、厳之尾羽張の養子）など諸家の嫡子または宗女たちだ。

一八〇年頃、向津姫は天神の勅に従い、伊弉諾太子で副都唐古を治める豊受皇太神（マガダ国大王、山王、牛頭天王、豊葦原中つ国王に駆け昇った大穴持、大国主、天照皇太神、熊野櫛御気野）を婿養子に迎えた。当時の向津姫は十代後半、皇太神は三十代半ばだったろう。

数年後、東の畿内が騒然としてきた。戦支度を万端整えた伊弉諾は、伊弉冉率いる女将軍団・皇太神率いる軍勢ともども、畿内鎮圧に動いた。

その最中に、皇太神が三輪氏ら畿内オロチ勢・瑞穂厳之国勢、出雲佐太国、尾張・丹後の海部家らと共謀し、「オロチ厳之国王朝を再現してみせる」と叫びながら瑞穂厳之国王朝（邪馬台国）を建てるや、水天神天照大神、天叢雲と称して大倭唐古に都した。天照大神妃で分身の瀬織津姫は西国勢の東征に備え、埴山姫と共に摂津広田国（西宮市）・生田川周辺（神戸市東部）に布陣した。

〔瀬織津（せおりつ）**姫**（比咩）〕、大祓詞に登場する祓戸四柱の神（祓い清めの神）の一神で、水神。『倭姫命世記』や『伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記』に、「皇太神宮荒魂、一名は瀬織津比咩神」、「天照荒魂、亦の名は瀬織津比咩神」とあるそうな。『中臣祓訓解』も「大祓詞」に登場する瀬織津比咩について、「伊弉諾の禊払いに登場するマガ津日神であり、天照太神荒魂」と伝える。

〔廣田神社〕（西宮市大社町）、主祭神は、天照大御神荒御魂、撞賢木厳之御魂天疎向津媛命。瀬織津姫とする説もある。当初は甲山山麓の上高隈原に鎮座していたが、後に御手洗川沿いに遷座した。江戸期に現在地に遷ったという。

伊弉諾は出雲勢を引き寄せるべく最新式八握剣（中細銅剣）四百を鋳造して出雲中にばらまくや、

畿内鎮圧に乗り出した。その最中に妃伊弉冉が岩屋邑（神戸市東部）で三輪大物主の手勢（八柱雷、八岐大蛇）に拉致されたと知って、岩屋邑を急襲したが、妃は既に出雲に連れ去られていた。

彼は踵を返して闇見国（月夜見国、黄泉国）に攻め入ったが、惨敗して向津姫・素戔嗚ともども熊襲に逃げ落ちた。ここに日隈は没落し、倭奴国王朝も日向の高天系、大倭の邪馬台国に割れた。副都に置き去りにされた大倭国は主家を見限り、天照大神にひれ伏す他なかった。

以後、天照大神は新たに鋳た八握の天叢雲剣（中細銅剣）を水天神の天璽として持ち歩く一方、蓬莱郷・常世づくり、仏法流布に入れ込んだ。太子の天鹿児山（天羽羽）も、天鹿児弓・羽羽矢を天璽として火天神に立った。この天下人交替は、後漢書に大乱、倭人伝に倭国乱れると記された。

一八〇年代後半、倭の国名を奪われた上に高千穂郷に押し込まれた向津姫は、天之国、高天と語る他なかったが、日神の天照大御神に担がれるや、臣下らは日の像の八咫鏡二面（日前鏡と真経津鏡）、及び日矛（熊野櫛御気野の神像）を鋳造して、真経津鏡を日神御魂の天璽として奉献した。

現人神の日天神に昇った日神は高千穂宮を天宮と定めるや、姉妹同様に暮らしてきた稚産霊を稚日女役（若日女をもじった位）に指名して倭（奴）国王朝再興に動き始めた。

以来、稚日女は日神の傍に日夜侍りながら食事や身の回りの世話に勤しむ一方、高千穂宮での養蚕・機織り・醸造の指導にあたってきた。

『古語拾遺』、「思兼神の議に従いて石凝姥神をして日の像の鏡を鋳しむ。初度に鋳たるは、少意に合わず。〔是、紀伊国の日前神。〕次度に鋳たるは、その形美麗し。〔是、伊勢大神。〕」

『日本書紀』、「石凝姥神を冶工として、・・日矛を作らしむ。是、紀伊国に坐す日前神なり」

一方、熊野家再興を急いだ素戔嗚は、日神から五皇子の一人で熊野家相続人の五十猛を養子に貰

い受けた上に、布都斯魂剣、熊野家神宝の日矛・日鏡・熊の神籬・羽太・足高・赤石の玉、さらに日の像の八咫鏡（最初に鋳込まれた日像鏡）も賜り、宗像家三皇女ともども新羅に出奔した。宗女の田心姫が宗像家に世々伝わる瑞宝十種を肌身離さず持ち歩いたのは、言うまでもない。

素戔嗚一行は新羅で熊野家相続人として、手厚いもてなしを受けた。

一八〇年後半、彼は新羅王に五十猛、日矛・日鏡など熊野家神宝を預けるなり、こう切り出した。

「今から、出雲のオロチ親子を退治して、豊葦原中つ国の建て直しにかかる。ことが成就できた暁には、五十猛に熊野家を継がせたい。挫折した折には、この悲願を五十猛に継がせるように」

素戔嗚の決意のほどを見て取った新羅王は、日矛に向かって次の誓いを立てた。

「彼を天日槍（ひぼこ）と命名して、我が王子として育てます。成人した暁には、大軍を預けてみせます」

その後、奥出雲に潜入した素戔嗚一党は、八岐大蛇（天照大神親子）を急襲して布都斯魂の十握剣で天羽羽を斬り捨て、二天神の天璽（天叢雲剣と天鹿児弓・羽羽矢）、火天神の妃豊受姫、火天神の遺児二人（饒速日と彦火明）、思兼の妹・万幡豊秋津姫を共に召し取る大手柄を立てた。

水天神の天照大神は、痛手を負いながら孫の日子坐王治める丹後に落ちていった。

『日本書紀』、「素戔嗚尊、十握剣を抜きて寸（つだつだ）にその蛇（オロチ）を斬る。尾に至りて剣の刃少し欠けぬ。その尾を割裂きて視せば、中に一の剣有り。草薙剣なり。・・本の名は天叢雲剣」、「蛇を断りたまえる剣は、今吉備の神部の許に在り」

『古語拾遺』、「素戔嗚尊、天より出雲国の簸の川上に降至ります。天十握剣〔其の名は天羽々斬という。今、石上神宮に在り。古語に大蛇を羽々という〕・・」

その後、素戔嗚はこれらを日神に送り届けた後、豊葦原中つ国再建に奮闘したが、佐太国の猿田彦と嫡子交換した実子の大己貴に悉く邪魔され、日の像の八咫鏡（日前鏡）までも奪われた。

素戔嗚の不遇を耳にした天日槍は、甲兵八千と共に西播に襲来して宍粟邑に籠る大己貴勢に襲いかかったが、火牛の計にはまって惨敗し、甲兵八千も日矛・日鏡など熊野家神宝も奪われた。

「垂仁紀」、「三年の春弥生に、新羅王子の天日槍来帰り。持て来る物は、羽太の玉一箇・足高の玉一箇・鵜鹿鹿の赤石の玉一箇・出石の小刀一口・出石の桙一枝・日鏡一面・熊の神籬一具、あわせて七物あり。〔日矛以外の熊野家神宝〕」

〔庭田神社の縁起〕（宍粟市）、「敵将は牛に乗せられ、村中を引き回された。大己貴は日矛・日鏡など日隈八神宝と甲兵八千を手にして八千戈と名のり、庭田で大いに祝杯をあげた」

敗れた天日槍は、円山川河口近くの瀬戸・津居山間の岩場を切り開き、沼水を日本海に押し流して農地に一変させたという。

その後、大己貴が葦原中つ国建て直しに成功して、越（高志）オロチ勢ともども西と北から邪馬台国を執拗に攻め立てた。

ここに至って、防戦一方の天照大神は妻の日神と手を組み、大政奉還するのが最善と悟った。

二一〇年代前半、天照大神は外敵（呉、遼東の公孫氏、新羅）襲来を案じる余り、国防の在り方について高天の日神と綿密に交渉した結果、「高天と邪馬台は一丸となり、立ち向かう」との盟約を交わした。その直後、彼は高千穂宮に向けて旅立った。

高天入りした彼は、自ら経津主、高皇産霊と語る一方、天孫饒速日（初代垂仁）に天璽の羽羽矢・瑞宝十種を授けて大倭降臨を命じた。だが、彼は一年足らずで逝ってしまった。

次に忍穂耳を向かわせたが、大己貴に妨害された。そこで日神と高皇産霊は、新たに鋳た布都御魂の十握剣（布都御魂剣）を武甕槌に授けて出雲に派遣し、戦わずして大己貴に国譲りさせた。

天宮高千穂宮に参内した大己貴は、日の像の八咫鏡、日矛・日鏡など熊野家神宝にひれ伏しながら日神夫妻に鞘当てしてきた過去の不義を詫びるとともに、彦火明の帝王教育を願い出た。

そこで二神は火天神に移籍した火瓊瓊杵に南蛮撃退の激務に加えて、天叢雲剣、日隈再興を祈願する八咫鏡、日矛・日鏡など日隈神宝、火天神の御子と印す羽羽矢を授けて吾田降臨を詔した。

『古事記』、「天照大御神、高木神、皇孫に八尺の勾玉、鏡（実際は日前鏡）、また草薙剣、また常世思金神、手力男神を副え賜いて詔りたまいしく、『これの鏡は専ら我が御魂として吾が前を拝くが如拝き奉れ・・』とのりたまう。この二柱の神は、五十鈴宮に拝き祭る」

その後の火瓊瓊杵は、笠沙に都して女神大山祇の娘、木花咲耶姫を妃に娶ると、日前鏡、日矛・日鏡など日隈神宝を奉って日隈（日前）を再興した。

二二〇年頃、天之尾羽張は失意の中で逝ったらしい。それと思しき王墓が糸島平野平原（三雲遺跡群の西方）から見つかっている。

【平原遺跡墳丘墓】（福岡県糸島市）、巨大な方形周溝墓の木棺外部から鉄製の素環頭太刀一本、ガラス製勾玉・メノウ製管玉多数、ネックレス・ブレスレット・イヤリングなど装身具、破断された四〇面分の鏡（方格規矩鏡三二、初代女系天神が秘蔵してきたと思しき径四六・五㌢㍍の内行花文鏡五）などが出た。そこには、三角縁神獣鏡は一枚も存在しない。

周溝の土壙墓からは鉄鏃・ヤリガンナ・鉄刀子が出土した。

この王墓は方形墓であるものの、副葬品として天之国祭器の鉄剣、数多の方格規矩鏡、厳之国の称える巨大な内行花文鏡数面分の破片が添えられていた。築造時期は、二〇〇年頃とする見方が有力だ。調査主任だった原田大六氏は、副葬品の内容から女性の墓と睨んでいた。

二二〇年代初め、天孫降臨を見届けた天照大神は、大己貴と彦火明（天火明）を連れて大倭に戻るや、天火明に日高見国を建てさせ、丹後と尾張の統治、さらなる東の領土拡大を命じた。その後の天火明（二代垂仁）は、東海・武蔵・房総・常陸・陸奥制圧の戦支度にとりかかった。

〔海部氏系図 本系図〕 始祖彦火明（天火明）―〇―〇―三世孫倭宿禰（珍彦）―武振熊（神功将軍）

「大祓の詞」、「此く依さし奉りし四方の国中と大倭日高見国を安国と定め奉りて、下つ磐根に宮柱太敷き立て　高天原に千木高知りて皇御孫（天火明）命の端の御殿仕え奉りて・・」

同じ頃、日神と素戔嗚も大倭に向かった。その途上で夫が急逝し、纒向石塚古墳に埋葬された。纒向上之宮に遷った彼女は、高天・邪馬台双方から倭の女王ヒコミに共立されるや、鬼道で瑞穂天神を祭る祭祀に、真経津鏡で日の神を奉る祭祀を覆いかぶせた天（厳）之国王朝（倭）に模様替えして瀬織津姫を自身の分身に取り立て、素戔嗚に全軍の指揮、大己貴に外交・都の警備を任せた。ついで豪族らに祝いの八咫鏡（祭祀用三角縁神獣鏡）を配り、己の御霊として祀らせた。

大事を決する際には祭場を新設して、瀬織津姫を神憑りする巫女として侍らせる中、天照大神の神託を請うた。すると、大神が彼女に神憑りしてきて口寄せした。天事代主（蛭児）がこのお告げを取り持ち、素戔嗚に伝えた。素戔嗚はこれを詔として朝臣に周知させた。

「倭人伝」、「其の国、本と亦た男子を以て王と為し、住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わし、年すでに長大なるも夫婿（天照大神）なく、男弟（素戔嗚）ありて佐けて国を治む。・・唯だ男子一人（天事代主、蛭児）ありて飲食に給し、辞を伝えて出入りす」

女王と分身は鬼道に熱中したあまり、共に厳之御魂天疎向津媛（姫）と呼ばれた。

「神功紀」、「神風の伊勢国の五十鈴宮に所居す神、名は撞賢木厳御魂天疎向津媛命・・」

〔皇大神宮別宮 **荒祭宮**〕、主祭神は、天照大御神荒魂。廣田神社主祭神の天照大御神荒御魂（撞

賢木厳之御魂天疎向津媛命）と同じとされる。

二二〇年代中頃、火瓊瓊杵は日向に遷都して西都（西都市妻、都万神社近辺）を開くと、国名を日前（ひのまえ）と改名し、火照（ほでり）（海幸彦）・火スセリ・火折に恵まれた。この国は、「倭人伝」や「記紀」に投馬国、狗奴国、熊襲と記された。

［都万（つま）神社］（西都市大字妻）、祭神は火瓊瓊杵の妻木花開耶姫。神社の近くには二人が新婚生活を送った八尋殿の跡や子湯郡の地名も残る。

一方の天火明は、日高見国を大倭から千葉県市原市惣社に遷し、小纏向風の東都を開いた。

「倭人伝」、「女王国の東、海（伊勢湾）を渡ること千余里にして、また国あり、皆倭種なり」

神門（ごうど）五号墳説明板（千葉県市原市教育委員会、平成二十六年三月）**要旨**

「邪馬台国時代の西暦三世紀になると、汎列島規模で地域間の交流が活発になります。

この時期、国分寺台地区の中台遺跡、南中台遺跡、長平台遺跡、天神台遺跡などでは、近畿地方（奈良県、滋賀県周辺）や北陸地方、東海地方、北関東地方などの特徴を持った土器が出土し、こうした地域からの移住や交流の地として、国分寺台地区は東日本でも拠点的な地域となった。

これらの遺跡群を中核とした地域統合の象徴として、神門古墳群（三号、四号、五号墳）がつくられました。また、遺跡群の中心となる中台遺跡では、祭政の場と推定されている神風の掘立柱建築跡も発見されています。幅六㍍の周濠をめぐらせた古墳群中最古の五号墳は、墳径三〇～三二・五㍍、高さ五㍍の後円部と、その西側の長さ一二㍍の前方部からなる全長四二・六㍍の前方後円墳です。前方部は短小であり、こうした墳形は、前方後円墳が定型化する以前の特徴です。このような古墳は、奈良県桜井市纏向古墳群を中心とし、全国的にも数が限られており、五号墳は東日本において最古の古墳です。三世紀前半の造墓と推定されています」

【神門五号墳】（市原市惣社）、鉄剣、近江・東海系の鉄鏃、東海系の高坏など祭祀用土器、

四・三号墳からも短剣・鉄槍・鉄鏃、東海系の特殊壺・高坏など祭祀用土器が出土した。

三号墳出土の鉄鏃は、ホケノ山古墳の鉄鏃と似ており、時期的にも近いとされる。

考古学者の寺沢薫氏は、中国の尺度に倣った規格と類型や、畿内系土器を共有する纒向型前方後円墳が出羽・陸奥・毛野・上総・信濃から伊勢・加賀・丹後・備前・備中・長門・伊予・九州にかけて散在すると指摘した上で、これに該当する出現期古墳として、纒向の石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳、神門古墳群中の五号墳・四号墳、臼ケ森古墳（福島県）、原口古墳（福岡県）、津古生掛古墳（福岡県）、端陵（木花開耶姫陵、薩摩川内市）等を挙げる。

【端陵（はしのりょう）】、山の稜線を利用した全長五十余㍍の纒向型前方後円墳と判明した。

その後、女王は吉野ヶ里に押し戻された伊都国に副都を開き、不老不死を謳う外交を図る一方、熊襲北上に備えて城塞化を急いだ。

次に、火瓊瓊杵から天叢雲剣、日矛・日鏡など日前神宝を取り上げ、天叢雲剣で以て天照大神及び高皇産霊の再来を祈り続けた。そのまた後、この日前神宝を熊野家神宝と称して紀伊・熊野西部に移封した五十猛（天日槍）に与えた。

結局、日隈は熊襲に日前鏡など日前神宝を奉祭する日隈（日前）、紀伊に日矛など熊野家神宝を祀る紀伊熊野家の二家に分かれて再興されたわけだ。

同じ頃、天火明も誉津別（火火出見）に恵まれた。両家の嫡子が成長すると、女王は天孫二人に対して、互いの絆を深めたいとし

て嫡子交換を命じた。その結果、火瓊瓊杵三男の火折が大倭に天降って誉津別に成りすまし、天火明嫡子の火火出見が日向に降って火瓊瓊杵に養子入りした。

二三八年、ヒミコは洛陽に使節を送り、魏帝から金印「親魏倭王」・鉄刀二・銅鏡（方格規矩鏡）百などを賜った。

同じ頃、海幸彦と火火出見が日前の太子の座を巡って争い始めた。敗れた海幸彦は、「これから先は、夜も昼も火火出見の宮殿を守って仕えるから許してくれ」と平謝りして、命乞いした。

二四〇年代中頃、ヒミコと火瓊瓊杵が刃を交えて争い始めた。その最中に、天火明が女王の座を奪いにかかったが、失敗して尾張勢・東都の日高見勢ともども常陸や陸奥に遁走した。

「倭人伝」、「其の八年（二四七年）、太守王頎、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼（ヒミココ、天孫火瓊瓊杵）と素より和せず」

『日本書紀』、「少彦名命（天火明）、行きて熊野の御碕に至りて、常世郷（常陸国）に適しぬ」

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地（信太）は、もと日高見」

その後のヒミコは、火瓊瓊杵と和睦してその児海幸彦に、火明と饒速日の家督、火天神の御子と印す天璽の羽羽矢、さらに瑞宝十種を相続させた上で、纏向宮上洛を命じた。

〔海部氏系図　勘注系図〕始祖彦火明（火明饒速日）―天香語山―天村雲―天忍人（倭宿禰）―

当時、大己貴は真心を込めて帝王教育を施した天火明がヒミコに背いたことで、二度と国政に関わるまいと固く決意して職を辞し、出雲の片田舎に引きこもっていた。ヒミコは火明饒速日が大己貴を連れて参内すると、鏡作郷で新たに鋳た八咫鏡（天照御魂神）を授けて、

「私亡き後、この八咫鏡を奉って日本朝を興し、十握剣二振りで以て日本朝と女王トヨを守護するように」と命じた。

その直後、倭姫を連れて天照大神御霊と天叢雲剣、妃瀬織津姫御霊（天照大（御）神荒魂）を奉じて伊勢国五十鈴の川上に遷座し、夫が一刻も早く降臨してくるよう祈り続けた。

「垂仁紀」、「倭姫命、・・大神の教の随にその社を伊勢の国に立つ。因りて斎宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮という。則ち天照大神の初めて天より降ります処なり」

二四〇年代末、女王が逝き、箸墓円形部に埋葬された。火明饒速日は十握剣・天照御魂神を神璽として日本朝を開き、独り倭王に昇ったが、トヨを軽視したことで素戔嗚勢の反発を招いた。

「垂仁紀」、「二年、纏向に都つくる。是を珠城宮と謂う」

「倭人伝」、「卑弥呼すでに死し、・・更に男王を立つるに、国中服せず。こもごも誅殺し、千余人を殺す。ヒミコの宗女、壱与（台与、トヨ、豊鍬入姫）、歳十三なるを立てて王と為し、国中ついに定まる」

二六〇年代後半（女王豊鍬入姫の晋朝貢直後）、彼はヒミコ陵を帆立貝形前方後円墳に造り変えるや、方墳上で封禅さながら

に郊祭して現人神の天神に昇り、羽羽矢及び瑞宝十種を天璽または天璽同然に奉って天照国照彦火明饒速日と語った。ついで、日本大物主大神（日本家家長と三輪大物主大神を兼務）に就任して、倭奴国王朝再現に動き出した。

〔**鏡作神社**（鏡作坐天照御魂神社）〕（田原本町）、祭壇中央に天照国照彦天火明命を祀り、左右に石凝姥命と天糠戸命を配して、外区の欠けた鏡を御神体（唐草文帯三神二獣の三角縁神獣鏡）として祀る。由緒や『大倭神社注進状裏書』に、「崇神天皇六年九月三日、この地において日御像の鏡を鋳造し、天照大神之御魂（社名から推して天照御魂神？）となす。今の内侍所の神鏡是なり。本社は其の試鋳の日像鏡を天照国照彦火明命として祀れるもので・・」とあるそうな。神紋は三つ巴、五七の桐。

☆この日御像の鏡は、紛れもない三角縁神獣鏡（唐草文帯三神二獣鏡）だ。これと同型で、完璧な鏡が犬山市東之宮古墳からも出土した。

その後、三代垂仁は二代垂仁実子で、大倭王孝元に養子入りした大足彦に倭王を譲りたいと伝えてきた。纒向宮に戻った大足彦は、日代宮で即位式に臨んだ。後世、景行と諡された天皇だ。

「景行紀」、「（四年）冬十一月、美濃より還ります。則ち纒向に都つくる。是を日代宮と謂す」

同じ頃、高千穂宮（鹿児島神宮の地）に遷都した火火出見も、日前を和（ヤマト）と改名して日本（やまと）朝打倒、日神が切望した倭奴国王朝再現、日隈・日前の再興、日前宮・熊野家の先祖祭祀復興を唱えた。

二七〇年代後半、火明饒速日（三代垂仁）は火火出見と交わした誓約を消し去りたい一心から、景行に熊襲（火火出見のこと）征伐を命じたが、彼は惨敗して日向高屋に六年間も幽閉された。

二八〇年代前半、仲哀も熊襲征伐を詔されると、紀伊の日矛を無断で櫃日宮に持ち去って日隈神宝の如く奉る中、武振熊（天火明の玄孫、神功将軍）と武甕雷（安曇磯羅）が十握剣で仲哀・女王神功を警護し、小碓（日本武）・吉備津彦兄弟・竹内宿禰が副都建設や戦支度に走り回った。

同じ頃、高千穂宮（宮崎神宮の地）に開都した磐余彦は、火火出見を襲名して彼の家督と遺志、天神の御子と印す羽羽矢、日前鏡など日前神宝を継ぐや、戦死者の再来を願う葬送用八咫鏡（三角縁神獣鏡）の量産を急いだ。それが完成すると、国の威信をかけた東征軍を編成し、二度と戻らぬ覚悟で橿日宮を目指した。

結果は仲哀軍が大敗して、日矛の神威を見せつけぬままに奪われた。神功も武甕雷も十握剣を差し出し、寝返ってきた。直ちに熊野家神宝は日前神宝に、布都斯魂剣も素戔嗚御魂に戻された。

その後、磐余彦は吉備・出雲、播磨・摂津・山背・近江、紀伊・熊野を制圧して敵将高倉下（火明饒速日の児、天香語山）による布都御魂剣献上、神倉山での熊野権現祭祀、紀伊でも日前鏡、日矛・日鏡を奉献して日前宮の先祖祭祀復興を晴れて叶えた。

［神倉神社］（新宮市）、神倉山に鎮座し、ゴトビキ岩なる磐座を御神体として、高倉下、天照大神を祀る。現在は熊野速玉大社の摂社。「熊野権現事」や「熊野権現垂迹縁起」によると、神倉山は天台山から飛来する天竺のマガダ国大王が神武天皇御世に熊野権現として、初めて垂迹した山とされる。

［日前（にちぜん）**宮**（日前神宮・国懸神宮）］（和歌山市秋月）、素戔嗚と五十猛が祀られていた秋月には、日前神宮と国懸神宮が隣接して鎮座する。合わせて、日前宮とも名草宮とも呼ばれる。

日前神宮は日像鏡を御神体に、国懸神宮は日矛鏡（日矛＋日鏡？）を御神体にすると伝わる。

〔**日前**（ひのくま）**神宮の古記録**〕、「日矛・日前鏡の神宝は神武東征の折、天道根に託された。神武軍が難波に到った際、彼はこの祭器を奉じて名草宮に馳せ参じ、日前・国懸の神として祀った」

三世紀末、熊野を北上した磐余彦率いる本軍、外戚の大山祇・海神本家筋、海神三神ら諸軍が大倭磯城に攻め入って日本朝を倒すと、火明饒速日は天璽の羽羽矢・瑞宝十種を差し出して帰順を願い出た。磐余彦は自身の羽羽矢と比べ見て、共に火天神の御子と悟り、彼の帰順を許した。

「神武記」、「饒速日命参赴きて、天つ神の御子に白ししく、『天つ神の御子天降りましつと聞けり。故、追いて参降り来つ』ともおして、すなわち天津瑞（天璽）を献りて仕え奉りき」

「神武紀」、「長スネ彦、饒速日命の天羽羽矢一隻・歩靫を取りて、天皇に示せ奉る。天皇、覧して曰わく、『まことなり』とのたまいて、還りて天羽羽矢一隻・歩靫を長スネ彦に賜示う」

この間、倭の女王は、豊鍬入姫→倭迹迹日百襲姫→気長足姫（神功）→倭（迹迹）姫と続いた。

日本朝滅亡直後、磐余彦は皇天（日神と高皇産霊）を称えて鳥見山北麓に御陵築造を詔した。

同時に、景行を介して日本武尊に対し、「陸奥の日高見勢を帰順させ、都に連れ戻せ」と命じた。

「景行紀」、「竹内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に、日高見国あり。・・』」

日本武は北伐途上の焼津で鹿狩り中に火攻めに遭遇したが、伊勢神宮の倭姫から賜った天叢雲剣で枯草を薙ぎ払い、難を逃れた。一息つくと、高皇産霊に感謝してお礼の言葉を申し述べた。

「この剣に一命を救われました。今より草薙剣と改め、高皇産霊御魂と拝してお仕えします」

日高見征伐の帰途、尾張に戻った彼は、妻宮ス姫に神剣を預けた後、伊吹山の賊討伐に出かけた。

「景行紀」、「王（みこ）の所佩（はか）せる剣（つるぎ）、王の傍らの草を薙（な）ぎはらう。故、其の剣を号けて草薙と曰う」

『古語拾遺』、「草薙の神剣は、まことに是天璽なり。日本武尊、かえりたまいし年に、留りて尾張の熱田社に在す」

〔**熱田神宮**〕（名古屋市熱田区）、主祭神は、熱田大神。草薙剣をご神体とする。草薙剣（一説で

は天叢雲剣）は、大日如来（高皇産霊、一説では天照大神）の姿でもあるという。
明治以降、神宮や明治政府の見解では、熱田大神は草薙剣を依り代とした天照大神とされる。
三〇一年（辛酉年）元旦、磐余彦は神日本磐余彦火火出見と号して橿原に大和朝廷を開くと、伊勢大神と熱田大神を型に取って鋳た神璽の鏡剣を捧げ持ち、始馭天下之天皇（神武）に即位した。
『古語拾遺』「天富命、諸の斎部を率て、天璽の鏡・剣を捧げ持ちて、正殿に安き奉り・・」
☆平安期になると、鏡剣の神璽は辛櫃に納められて天皇の身辺に置かれ、次の天皇即位時に引き継がれた。『村上御記』などによると、
「内侍所（後の賢所）の辛櫃中には三面の鏡があり、一面は伊勢分身の『伊勢御神』、一面は日前神社の御正体らしき鏡、残る一面は定かでなかった。天徳四年（九六〇年）に内裏が焼失した際、『伊勢御神』は無事であったが他の二面は焼けて原型を失った」という。
剣も、壇ノ浦で入水した安徳天皇と共に海に沈み、新たな剣に換えられた。長い年月とともに神璽の扱い方も変遷した。鏡は別殿（賢所）で祀られ、神璽は剣と玉におき替わった。
同時に、大倭王開化の皇子・御間城入彦（崇神、初国知らしし天皇）を太子に指名した。ついで、火明饒速日の児可美真手に物部姓と布都御魂の十握剣を授けて、海幸彦がかつて火火出見に誓約した（磐余彦）火火出見の宮殿警護を厳命した。
冬十一月、可美真手は正殿に瑞宝十種を奉り、帝と妃の鎮魂を崇め鎮めて長寿を祈った。
『先代旧事本紀』「冬十一月に、可美真手命は正殿の中に天璽の瑞宝を奉った。帝と妃の御魂を崇め鎮めて、長寿を祈った。御鎮魂祭は、これより始まれり」
〔石上神宮〕（奈良県天理市）、石上振神宮、石上布留神宮、石上布都御魂神社、石上布都大神社、布留大明神と呼ばれてきた。主祭神は、布都御魂大神＝布都御魂剣に宿る神霊。配神は、布留御魂大神＝瑞宝十種に宿る神霊、布都斯魂大神＝天羽羽斬剣に宿る神霊、宇麻志麻治命ら。

〔**石上神宮の社伝**〕、布都御魂の十握剣は、葦原中つ国平定時に大いなる神威を放った。神武天皇は東征途上の熊野で熊に襲われて窮地に陥った際、この剣の威光で救われた。

その後、この剣は物部氏の祖・宇摩志麻治によって宮中で祀られてきたが、崇神天皇七年、その子孫の伊香色雄命が石上神宮の高庭の地に遷し、「石上大神」として奉った。

以来、その地は何人たりとも、足を踏み入れることのできない禁足地とされてきた。

明治七年、大宮司菅政友が教部省の許可を得て禁足地を発掘し、神剣・勾玉等を発見した。

明治天皇にこの件を奏上したところ、布留神宮の御霊を再び布都斯魂大神としてお祀りする一方、これに模して造った神剣を吉備の石上布都魂神社に寄進して、出土品を奉斎する本殿を禁足地に建造する運びとなった。明治十一年の再調査で、布都御魂剣らしき神剣が出てきたという。

〔**石上布都魂神社**〕（岡山県赤磐市）、祭神は素戔嗚尊。明治時代までの祭神は、素戔嗚が八岐大蛇を斬った神剣に由来するとされた。明治三年の「神社明細帳」には、十握剣と書かれていたそうな。この神剣は、崇神期にこの地から大和国の石上神宮に移されたと伝わる。

〔**鎮魂祭**（ちんこんさい、みたましずめのまつり）〕、宮中三殿の綾綺殿において、新嘗祭前日に天皇の鎮魂を祈る儀式。戦後、皇后や皇太子夫妻に対しても行われた。

〔**魂振の儀**〕、鎮魂の儀のあと、天皇の衣を左右に十回振ってとり行う儀式。これは天孫饒速日が玉つ宝をして、一から十の呪文を唱えながら、ゆらゆらと振っては招魂を願ったことに由来する。

三〇四年の春、鳥見山北麓に皇天の御陵が完成すると、神武はその円墳上に造営した霊時（まつりのにわ）（天地五帝の神霊を祭る霊廟）で、高皇産霊に代わって郊祭に臨んだ。即ち、箸墓円墳に眠るヒミコ御霊を天照大御神御魂に蘇らせた上で霊時に移し祭るとともに、纒向石塚古墳に眠る天照大神御霊も高皇産霊御魂として霊時に招来し、共に天（日天神）に配したのだ。同時に、伊勢神宮の八咫鏡および熱田の草薙剣を二天神の天璽に奉った。

「神武紀」、「我が皇祖の霊、天より降りみて、わが身を光し助けたまえり。今、諸の虜すでに平けて海内事無し。以て天神を郊祀りて、用て大孝（皇天にしたがうこと）を申べたまうべし」、「霊畤を鳥見山（桜井市外山）の中に立てて、皇祖天神を祭りたまう」

『古語拾遺』、「聖皇（天皇）の登極（天つ日継ぎしろしめ）して、終を父祖に受けたまい、上帝（五帝）を類り、六宗を禋り、山河を望り、群神を偏りたまう。然れば、天照大神（日神と高皇産霊）はこれ祖これ宗（皇祖皇宗）、尊きことならび無し」

つまり、神武は高皇産霊が封禪を成したとしても道理に適うと見て、彼に代わって柴を勢いよく燃やす中で封禪さながらに郊祭し、その高煙が天に通じたところでお礼の言葉を申し述べるとともに、皇祖天神を天に配して皇祖皇宗に奉ったのだ。

この儀式の拠りどころは五帝期の封禪や、成王を補佐した周公が成王に成り代って、后稷（周祖棄）を南郊に祀って天（農耕の天神）に配し、秋に新穀を奉った周礼、武王を明堂に祀って皇宗に配した周礼、さらに光武帝が漢朝を再興した際の封禪や郊祭にあったことは明白だ。

〔五帝期の封禪と郊祭〕、五帝最初の黄帝が泰山の頂で円壇を築いて天を祀り（封祭）、ついで山麓の梁父山で地を方形に均して地の神を祀る儀式（禪祭）を言った。かくして、黄帝は天帝や仙人たちと親しく交わり、人でありながら不死身に成り得たという。即ち、現人神となったのだ。

次に、堯から跡を託された舜が封禪を試みた。彼は天体の動きを見て天意に適うと知るや、上帝に対して類の祭を行い、六宗に禋の祭をし、山川に望の祭をして、群神もあまねく祀った。これが最初で最も盛大な封禪とされるが、その封の礼は明らかでない。

その年二月、東方に巡守して泰山に到ると、柴を焚きながら泰山を祀った。続いて有名山河（九州の名山・大河など地の神）に位を贈って望祭した後、東方の諸侯らと会した。

〔周成王の郊祭〕、周公は幼い成王を助けて政に就くと、后稷（棄）を南郊に祀って天（農耕の天神）に配し、文王を明堂（祭祀を行う宮殿）に祀って上帝（皇祖）に配した。それ以前に、火徳をそなえた文王は赤い鳥が現れるという瑞祥によって封禪の天命を受けたが、泰山での封祭を行わず、武王も殷を破った二年後の天下が未だ安定しない時期に逝ってしまった。

このことから、続く成王が封禪を成したとしても、道理に適うとされた。

〔後漢光武帝劉邦の封禪と郊祭〕、彼は洛陽に都して漢朝を再興すると、二五年六月、柴を焚いてその高煙が天に通じたところで皇天上帝にお礼の言葉を告げるとともに、水・火・雷・風・山・沢の六宗に禋祭し、ついで望祭して山河など后土も祀った。

ここに皇帝に就いて建武と改元し、天下に大赦した。同時に、国政に携わる高官の登用に際しては、実務才能や知識の有無よりも徳・孝行・清廉を備える気骨の士を重視して、天下にこれを奨励した。この気風は学問の世界だけでなく庶民の間にも広まった。

五六年二月、光武帝は魯国から泰山に向けて巡幸した。遠くから泰山を望む地で柴を焚きながら望祭した後、泰山の頂と麓の梁父山で封禪を成し遂げた。翌建武中元二（五七）年の春正月に初めて北郊を立て、后土を祀った。その直後、倭奴国王の遣いが遠路海を渡って朝貢してきた。

『後漢書』、「（漢朝再興を遂げた二五年）六月末、皇帝の位に即く。燔燎（はんりょう）して天に告げ（柴を焚いて祭り、高煙が天に通じたところで天に報告）、六宗に禋し、群神に望す。・・ここに於いて建元して建武と為し、天下に大赦し・・」、「二年（五七年）春正月、初めて北郊を立て、后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉献す」

ところが、その翌月、帝は六十二歳で急逝した。

〔魏明帝の郊祭〕、景初元年十月、明帝は洛陽の南に円丘を築き、続いて十二月冬至の日に初めて郊祭を行った。翌二年（二三八年）元旦に、司馬宣王に兵四万を授けて公孫淵討伐を下命した。

「明帝紀」、「（景初元年）冬十月、洛陽南の委栗山に円丘を造営し、十二月冬至に始めて天地を祀った。二年春正月、詔して大尉司馬懿に軍勢を率いて遼東を撃たせた」

☆この年六月中に、ヒミコの使節が帯方郡で太守と会見し、十二月中に明帝に見えた。ところが翌年元旦、帝は三十四歳で急逝した。

この鳥見山から北へのびる尾根上には、四世紀初頭に造営された日向型の柄鏡形前方後円墳が鎮座する。桜井茶臼山古墳と呼ばれるそれには、樹齢千年の巨木からなる木棺が安置されていて、木棺内外に二六面の三角縁神獣鏡をはじめ、内行花文鏡・方格規矩鏡・画文帯神獣鏡・獣帯鏡、三種神器である曲玉・鉄剣、王権を示す碧玉製の玉杖・玉葉などが副えられていた。

【桜井茶臼山古墳】（桜井市外山）、鳥見山麓にある全長二〇七㍍、円形部一一〇㍍の柄鏡形前方後円墳。一九四九・五〇年の調査では、長大な竪穴式石室、その上に土盛りした方形壇、方形壇の縁に並ぶ二重口縁壺形埴輪が出た。これと同類の壺が箸墓古墳の方墳上にもあった。

四面に朱塗りした石室には、長さ五・一九㍍のトガをくり抜いた木棺があった。石室内から、王権の象徴とされる碧玉製の玉杖、三角縁神獣鏡六面以上・内行花文鏡三面以上・方格規矩鏡・画文帯神獣鏡など二十面分近い鏡片、各種石製品、鉄剣・鉄鏃、勾玉などが出た。

平成二一年の再調査では、方形壇（東西九・二㍍、南北一一・七㍍）の周囲で幅約一㍍の溝が見つかり、溝の四方で柱十本分の痕跡が確認された。石室周辺から、大量の鏡破片や炭が出土した。近年の再調査によって、三世紀末から四世紀初めの築造と断定された。出土した鏡の破片から計八一面の銅鏡があったと判明した。福岡県平原墳丘墓の四〇面を大幅に上回り、最多である。径四十数㌢㍍に達する内行花文鏡の破片も出た。類似の鏡が平原墳丘墓から五面も出ている。

橿原考古学研究所はこの古墳について、「石室上に土の方形壇を築き、壇周囲に供物用の壺

を並べ立て、ついで火を使った葬送儀礼を営んだ後に、直径三〇㌢㍍、高さ二・六㍍の丸太一五〇本で玉垣風に囲って聖域化した」と見立てる。

その後の神武は、程なく崩御したのか、それとも隠遁したのか、消息は不詳だ。

磐余地方の阿部丘陵上に鎮座する全長二二四㍍のメスリ山古墳（桜井市、四世紀の初め？）も、謎多き柄鏡形前方後円墳だ。後円部の埋葬施設には、主室と副室の竪穴式石室があり、主室は盗掘されていたが、それでも三角縁神獣鏡片・内行花文鏡片、各種石製品・玉類などが出た。

盗掘を逃れた副室からも、儀礼用らしき鉄製の弓矢五本、鉄鏃二一二、鉄製のヤリガンナ、斧、手鎌、ノミ、刀子、ノコギリ、銅鏃二三六が出土した。さらに玉杖四本分に相当する石製品など帝王級副葬品が多数見つかった。類似の玉杖は桜井茶臼山古墳からも出ている。

この円墳上にも方形壇があって、最長二・四㍍の円筒形埴輪が壇の周辺を二重に取り巻く。にもかかわらず、被葬者の名は伝わっていない。「神武記」は、「御陵は、畝傍山の北、白檮の尾の上にあり」と記しているが果たしてそうだろうか。

磐余地方の山の稜線に、四世紀初め築造の帝王級かつ日向式柄鏡形巨大前方後円墳が、表面上漢文帝・光武帝の遺勅に倣った形で二陵も築かれたのは、日向を発った和国勢が大挙東征してきて大倭磯城に到り、纏向に都する日本朝を倒すと同時に、大和朝廷を打ち立てた証拠なのだ。

〔**漢文帝**（在位前一八〇～前一五七年）**の遺勅**〕、霸陵を造るに際してこのように詔していた。

「霸陵を治むるに、皆、瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾りと為すを得ず。（土を盛り上げる）墳を治めず、省（節約）を為し、民を煩わすこと無きを欲せり」

〔**後漢光武帝劉秀の遺勅**〕、「朕は民に益するところが無かったので、葬送の品は瓦器（土器）を用い、金銀銅錫などで飾らぬようにせよ。墓も自然の山形を利用するに止め、墳丘を築いてはならぬ。できるかぎりの倹約を宗とせよ」

弥生史の常識や通説を歴史的観点から検証していくと、戦前から信じて疑うことのなかった皇統万世一系も、「百余国を束ねる統一王朝など存在しなかった」とする戦後の学校教育も、間違いだらけと分かります。邪馬台史の全貌がとんと解明できない原因は、ここにあります。司馬遷の信念や和辻哲郎博士の説に立ち返り、一から考え直す以外にありません。

縄文晩期、呉太伯ら子孫が建てた天之国は、前三世紀の倭国（高天）王朝、一世紀の倭奴国王朝（天地）、大乱後の南九州では高天系の日隈・日前・和国の名で再興された後、大和朝廷として蘇った。二世紀後半、大乱に見舞われた倭奴国王朝は、伊弉諾・日神の天照大御神・火瓊瓊杵・火火出見・磐余彦率いる高天系、水天神天照大神・日神改めヒミコ・垂仁・景行率いる瑞穂の邪馬台国に分裂して覇権を争い、三世紀後半、和王磐余彦（神武）が東征して橿原に大和朝廷を樹立し、倭奴国王朝再興を叶えた。東西に二朝が並立した本物語では、記紀の矛盾が自然消滅する上、中国史書、考古学結果、神社の縁起、各地の伝承・地名とも概ね合致する。視点を変えると、こんな見方のできる歴史だった。

★前五～前四世紀、戦国中国の覇権争いに敗れて、日本列島に逃げ込んだ呉王夫差と越王句践の子孫らが建てた天之国と厳之国は、邪馬台国末期に至るまで延々と覇権争いを繰り返してきた。結果は、戦国期の中国史とは正反対に、天之国が天下を制して大和朝廷を開いたのです。

★縄文中期に北九州に興った那珂つ国（中つ国）も、弥生期に興る天之国と厳之国も、不老不死実現を掲げながら独自の蓬莱郷づくり、神仙の国（神国）づくり、天竺流常世づくりに奮闘努力してきた。

★日神が切実に願った倭国・倭奴国王朝の再現や、海幸彦が火火出見に命乞いして誓った誓約は、火火出見を襲名した磐余彦が大和朝廷の初代天皇即位後に、晴れて叶った。即ち海幸彦（火明饒速日）末裔は、物部姓と十握剣を賜り、磐余彦火火出見の宮殿を夜も昼も守護する役目を背負わされた。

★高皇産霊による葦原中つ国平定、神功の新羅遠征、日本武尊による日高見の蝦夷討伐は、布都御魂の十握剣、日矛、草薙剣（天叢雲剣）の威光の下で、「刃に血塗らずして勝つ」を達成した実話だ。これを国是に掲げた邪馬台史は、三国志や戦国・幕末期を遥かに凌ぐ世界中に誇れる歴史でした。

倭の女王ヒミコ（撞賢木厳之御魂天疎向津媛）の一生

倭奴国王朝六代女系天神の宗女として誕生→**向津姫**、**若日女**→**天照大御神**、**日神**→倭の女王**ヒミコ**→天照大御神

1 **倭奴国**（倭＋豊葦原中つ国）**王朝六代女系天神、天之尾羽張神の時代**（一六〇年前後～一八〇年代前半）

一六五年頃、六代女系天神の宗女として伯土の天宮（天上の都）で誕生→向津姫、天之国の**若日女**

※豊受（天照）皇太神（熊野櫛御気野、出雲では山王、牛頭天王、大穴持、大国主）→（向津姫に婿入り）

婿入前の彼は、伊雑宮の巫女玉柱屋姫（瀬織津姫？）、尾張海部家の姫らを妃に娶り、天鹿児山をこしらえた

一八〇年代中頃、三輪氏らと組んで謀反し、邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝→ヒミコの天（厳）之国王朝（倭）

→火明饒速日の日本朝に発展）を興して天叢雲、天照大神、水天神、倭大物主、大蛇と語る→大乱に発展

※大乱時、天照大神妃で分身の瀬織津姫（天照大神荒魂）→広田国（西宮市）に布陣して合戦を采配

2 **王朝瓦解後、高千穂郷に逃れた**高天（日高＋天之国、倭と語れず）**期**（一八〇年代後半～二二〇年代前半）

天之国の天宮、高千穂宮では、**天照大御神**、**日神**（七代女系天神）（齢二十代前半で、日神に即位）

※稚産霊→日神分身の稚日女→丹生都比売、丹生都比売神社（和歌山県）祭神→伊射波神社（鳥羽市）祭神

3 天照大神、高皇産霊と称して高千穂宮に赴き、葦原中つ国平定→**日神**に大政奉還→高天との統一王朝、誓約

4 **天（厳）之国**（倭）**王朝期**（二二〇年代前半～二四〇年代後半）（齢五十代後半で大倭纒向宮に遷座）

纒向入りして倭の女王**ヒミコ**（日継の御子、日の巫女）に即位。亦の名は撞賢木厳之御魂天疎向津姫

※天照大神分身の瀬織津姫→ヒミコ分身（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、天照大御神荒魂）に転身

5 **女王退位後**、笠縫邑（檜原神社の鎮座地）や伊勢五十鈴宮では、天照大御神

※笠縫邑では天叢雲剣で以て天照大神を祭祀。五十鈴宮では、天叢雲剣で天照大神、檜御柱で高皇産霊を祭祀

6 **二四〇年代末、五十鈴宮で逝去**（享年八十余歳）→箸墓円形部（円壇→五段重ね円墳）に埋葬された

7 三〇四年二月二三日、鳥見山中の祭場（桜井茶臼山古墳）で、夫の御魂と共に皇祖天神に配された

※内宮祭神は天照大御神。荒祭宮祭神は天照坐皇大御神荒御魂とも天照大御神荒御魂とも。一説では瀬織津姫。

内宮別宮伊雑宮（天照大神の遥宮）祭神は、天照大御神御魂、相殿祭神は玉柱屋姫命。廣田神社（西宮市）祭

神は天照大御神荒御魂（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、一説では瀬織津姫）。生田神社祭神は、稚日女尊

本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕

「けだし神の子か」

１８４年（大乱勃発）　２１０～２３０年　２５０～２７０年　２８５～３００年過ぎ

【合成系図】

「吾は、現人神の子なり」

猿田彦（佐太彦）

（若くして他界）

日子坐王

天羽羽

火天神天鹿児山

水天神天照大神

饒速日（天孫、初代垂仁）

日子坐王

御炊屋姫

味間見（物部氏遠祖）

日本大物主大神

稲日大郎姫

日本武

彦湯産隅

日葉酢姫ら五姉妹

遠津年魚眼眼妙媛？

彦火明、二代垂仁

大足彦（大倭家移籍、彦太忍信襲名、景行）

倭姫（大倭家移籍、五代女王）

豊城入彦（豊国移籍）

影姫

武内宿禰

天火明（天孫）

狭穂姫

誉津別（火火出見）

誉津別

豊鍬入姫

豊国移籍、二代女王トヨ）

彦狭嶋（大倭家移籍）

仲哀

気比大神（誉田別）

天香山（鹿児山襲名、尾張氏遠祖）

三炊屋姫（御炊屋姫襲名）

火明饒速日（三代垂仁）

可美真手（味間見襲名→物部氏の祖）

神功

気長足姫（四代女王）

妃瀬織津姫（天照大神荒魂）→廣田神社祭神

※→実家丹後海部家に戻り豊受大神を祭祀

分身待遇　火天神妃豊受姫→天孫と共に降臨※

→丹生都比売神社祭神

分身稚日女（豊受姫の母、稚産霊）→丹生都比売

日神

天照大御神

忍穂耳

火瓊瓊杵（天孫）

木花開耶姫

火照（海幸彦、火明）

火スセリ（海幸彦襲名）

火折・火火出見（山幸彦）

活玉依比売

日本大物主大神

天道姫

天香語山（尾張氏の祖）

天村雲

天香山襲名、高倉下

天叢雲襲名

オオタタネコ

神の子

神功

○

磐余彦（神武）

応神

伊弉諾

伊弉冉

大倭に遷座

天照大御神荒魂）→廣田神社・荒祭宮祭神

分身瀬織津姫（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、

大和朝廷の開祖　気比大神と名を交換

始馭天下天皇　誉田別と語る→応神

誉田別

倭女王

大日孁貴

1ヒミコ（撞賢木厳之御魂天疎向津姫）…2トヨ……3／4神功……5倭（迹迹）姫

2豊鍬入姫　3倭迹迹日百襲姫

※水天神天照大神＝マガダ国大王、山王、牛頭天王、神皇産霊、大穴持、佐太大神、大国主、月読命、熊野櫛御気野、御饌津神、豊受（天照）皇太神、天御中主、大蛇、天叢雲、倭大物主、所造天下大穴持、豊受大神、熊野権現

◇箸墓古墳の変遷

「倭人伝」、「卑弥呼以に死し、大いに冢を作る。　径百余歩、殉葬する者、奴婢百余人」
「崇神紀」、「倭迹迹日百襲姫、大物主の妻となる。・・ここに倭迹迹日百襲姫、薨りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。号けて箸墓という。・・大坂山の石を（手ごしに）運びて造る」
『史記』「武帝紀」、前八七年二月、武帝は長安西の離宮で七十年余の生涯を閉じた。祖父の文帝が霸陵（王の墓）を造るに際して、
「霸陵をおさむるに、皆、瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾ることなかれ。墳（土盛り）を治めず、省（節約）をなし、民を煩わすことのなきように欲す」
と詔したにもかかわらず、武帝は即位三年目から五十余年も費やして寿陵を造らせてきた。
茂陵と呼ばれるこの陵墓は、方二百三十㍍、高さ四六㍍もあった。当初に植えた木々が一抱えもある大樹に成長し、これを守る邑の人口が二七万人にも達していた。
☆高祖の墓より大きな茂陵には、彩色の施された棺槨の中に柩が安置されていて、その中に玉箱・玉杖ほか、武帝が生前愛用した六経の経典、数え切れない金銭財物が副葬されていた。
以後の帝は厚葬を戒めてきた。漢朝末期の成帝も自陵を品素に造り、こう詔したほどだ。
「徒に民を駆り出して陵邑を盛んにするは、天下人心に動揺を与えるゆえ止めるよう」
纒向（桜井市）には、纒向石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、ホケノ山古墳、箸墓古墳など前方後円墳六基がある。その中で、三世紀中頃～後半に築造された箸墓古墳が一際大きい。纒向石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、ホケノ山古墳は、箸墓よりも古い時期の古墳とされる。
【箸墓古墳】、方形部がバチ形をした出現期の前方後円墳で、纒向の平地に築かれ、全長二八〇㍍、円径一五七㍍、高さ二五㍍もある。その規模は大和で第三位、全国でも一一番目だ。円墳部は割石が五段に敷かれた石塚で、方墳部は葺石を覆い隠す形で二〇㌢㍍ほど盛土された

らしい。

このように、円墳と方墳の築造形態が異なること、円墳上にあった特殊器台形埴輪・特殊壷が吉備に由来する三世紀中頃とされる一方、方墳南端から採取された二重口縁壷は三〇〇年頃の吉備系土器だったことで、円墳と方墳の築造期が異なると指摘する向きもいる。

近年の方墳周辺の調査では、方墳部は二七〇～三〇〇年頃の築造と判定された。

平成二十年八月には、前方部正面に幅六〇～七〇㍍もの外濠跡が見つかった。周辺の発掘結果ともあわせると、内濠・外濠を備えた古墳だったらしい。だとすると、国内最大の仁徳天皇陵（五世紀前半、全長四八五㍍）に匹敵する周濠が、三世紀中頃に存在していたことになる。

平成二四年六月、橿原考古学研究所は、ヘリコプターからレーザーを使って箸墓古墳を測量した立体地図を発表した。墳丘の段数は後円部が五段、前方部は三段と判明した。

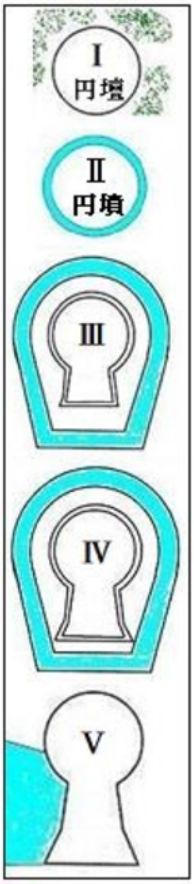
【ホケノ山古墳】箸墓古墳の東に位置する全長八〇㍍の帆立貝形前方後円墳で、葺石と周濠を伴う。古墳時代前期初頭に造られた纒向型前方後円墳と見なされている。

副葬品や埋葬施設などから見て、出現期大型前方後円墳である箸墓古墳からあまり遡らない時期に造られた前方後円墳墓とされ、後円部中央から石囲いの木槨が出土した。

石囲いの長さは約七㍍、幅約二・七㍍、高さ一・五㍍ほどあり、その内部に木槨が設けられ、

コウヤマキ製の長さ五㍍の木棺が納められていた。木棺内は、水銀朱で覆われていたらしい。副葬品・出土品として、大型壷、中型壷、銅鏃約六〇、鉄鏃約六〇、素環頭大刀一、鉄製刀剣類一〇、画紋帯神獣鏡一、二重口縁壷二〇（庄内式）などが残されていた。

箸墓古墳とホケノ山古墳の築造形態から推して、箸墓古墳は以下の五段階の改築が繰り返された後、現状に到ったと見定めたが、どう思われるだろうか。



Ⅰ 円形壇の築造（二四八、九年）

⑴魏の役人張政が見守る中で百余人が殉葬されたことや、「倭人伝」に塚高さの記載がないことで、当初のヒミコの墓は円壇と考えられる。

⑵張政が纒向宮を去って伊都国に戻るや、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に遷された。

ホケノ山古墳は、ヒミコの存命中に寿陵として造られたらしい。

☆箸墓古墳は、ヒミコの宮殿・上之宮（巻向駅北、辻・巻野内）の真南に位置する。真北には、黒塚古墳が鎮座する。この三点を通過する南北の古代道は、上つ道と呼ばれてきた。

Ⅱ 五段重ねの石積み円墳に造り変え（二五〇年頃）

⑴張政の帰国後（二五〇年頃）、円壇の周濠（内濠）を掘った残土で以て、五段重ねの石積み

円墳に築かれた。その間、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に納められた。

⑵ヒミコの亡骸は、ホケノ山古墳から円墳最上段に埋葬された。その際、吉備に由来する特殊器台形埴輪・特殊壺が円墳上に副えられた。

Ⅲ 帆立貝形前方後円墳に造り変え（二六〇年代後半）

⑴トヨの朝貢後、外濠（幅六〇～七〇㍍）を掘った残土で、帆立貝形前方後円墳に造り変え。

⑵想像するに、火明饒速日はこれを泰山・梁父山に見立てて郊祭し、自ら天神（天照国照彦天火明饒速日）に昇ったのであろう。

『晋書』「武帝紀」、「泰始二（二六六）年十一月、倭人来りて方物を献ず。南と北に円丘・方丘を併せ、二至の祀郊に合す」

⑶二七〇年代前半、女王トヨが三十五歳で逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に納められた。

☆大神神社は、ホケノ山古墳が豊鍬入姫の墓と伝える。

Ⅳ バチ形前方後円墳に造り変え（二七〇年代前半）

⑴その数か月後、倭迹迹日百襲姫が逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に仮葬された。

⑵バチ形方墳部が継ぎ足され、倭迹迹日百襲姫がそこに埋葬された。

⑶方墳表面が大坂山から運んできた石で覆われた。

★崇神紀に、箸墓が築かれた時の様子が記されている。ここから、崇神・火明饒速日（日本大物主大神）・倭迹迹日百襲姫が三世紀後半に共に生きていたと分かる。

【箸墓伝説】、倭迹迹日百襲姫は大物主神の妻となった。その神は昼には来ず、夜になってから現れた。そこで倭迹迹姫は、夫にたずねた。

「暗くてはっきり見えない故、今宵はお留まりください。朝方に、麗しいお姿を拝見したいものです」

大神が答えて言うには、

「道理である。明け方に汝の櫛箱の中に入っていよう。わが姿形に驚かぬように」と。

姫が夜明けを待って櫛箱を開けると、衣紐大の麗しい小蛇が箱に入っていた。姫は驚きのあまり叫び声をあげた。大神はたちまち人の形に戻って、

「汝は我慢できず、私に恥をかかせた。ここから姿を消すことで、汝にも恥をかかせようぞ」と言うなり、大空を飛ぶようにして御諸山に登り帰った。姫はそれを仰ぎ見て後悔したのか、腰の力が抜けて床にドスンと座り込んでしまった。そのとき、箸が体に突き刺さってみまかり、大市に葬られた。時の人はその墓を箸墓と呼んできた。この墓は、昼は人が造り、夜は神（三輪氏）が造った。大勢の人が大坂山から箸墓まで並び立ち、石を手渡して運んだ。

V バチ形を伸長した前方後円墳に造り変え（三〇〇～三〇四年初め）

(1)古墳の西を掘り起こし、ため池（大池）がつくられた。

(2)濠内の水がため池に引かれた後、内外の濠とも、ため池を掘った残土で以て埋め戻された。

(3)バチ形の方墳部がため池を掘った残土で、さらに継ぎ足された。

(4)女王トヨの亡骸も、ホケノ山古墳からそのバチ形部に遷された。

(5)石葺きの方墳全体がため池を掘った残土で、うっすらと覆われた。

(6)直後、二重口縁の壺形埴輪（三〇〇年前後の吉備系土器）がトヨの亡骸真上に副えられた。

★桜井茶臼山古墳の円墳・方墳上に霊畤（天地五帝の神霊を祭る霊廟）が造営されると、箸墓円墳に眠るヒミコの亡骸が掘り出され、桜井茶臼山古墳の霊畤に遷された。ついで纒向石塚古墳に眠る天照大神御霊も高皇産霊御魂として霊畤に招来された

★霊畤の周囲に、三〇〇年前後の吉備系二重口縁壺が並べ立てられた。

◇家長と祭器

◆縄文晩期の那珂つ国……死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細玉、足高・羽太・赤石の玉など玉八つに加えて、
熊の神籬・蜂の領巾など玉つ宝十種

◆前五世紀の天之国……日鏡、奥つ鏡・辺つ鏡など鏡三面

◆前四世紀の厳之国本家…死返玉など玉五つ（もと那珂つ国祭器）、奥つ鏡・辺つ鏡（もと天之国祭器）に加えて、
即ち宗像家　　軍団を指揮する八握の細形銅剣（神璽）、船団を指揮する蛇の領巾など瑞宝十種

◆前四世紀の熊族……日鏡（もと天之国祭器）、玉三つ（もと那珂つ国祭器）、熊の神籬など熊族神宝

◆前三世紀の倭国王朝（高天）…北方系銅鏡
日隈（熊野家）……玉飾りを結び付けた瓊矛（神璽）、日鏡・玉三つ・熊の神籬など日隈神宝

◆豊葦原中つ国の天叢雲…死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡に加えて、天璽の天叢雲剣（八握の細形銅剣）、
蛇の領巾など瑞宝十種

中興の祖天香来土……黄金の弓矢

◆厳之国宗家の宗像家……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、天叢雲剣（八握の細形銅剣）・蛇の領巾など瑞宝十種

◆伊都国王朝の天叢雲……天璽の天叢雲剣（八握の有柄銅剣）、前漢鏡の内行花文鏡、巨大な国産内行花文鏡

◆倭奴国王朝初代女系天神の天常立…光武帝から賜る天璽の方格規矩鏡　鑓溝遺跡（糸島市）が彼女の墓？
国常立（天常立の婿）…神璽の金印「漢委奴国王」
日隈（熊野家）……玉飾りを結び付けた瓊矛、日鏡・玉三つ・熊の神籬など日隈神宝
日高の高皇産霊……天神から布都斯魂の十握剣を託され、倭奴国王朝を守護
六代天神天之尾羽張…天璽の方格規矩鏡　平原墳丘墓（糸島市）が彼女の墓？

◆大倭家と太氏一門……銅鐸　◆面足神と大山祇神…弓矢　◆三輪氏…鉄刀

◆日隈（熊野家）の伊弉諾…神璽の瓊矛、日鏡など日隈神宝、布都斯御魂の十握剣で天神と倭奴国王朝を守護

◆邪馬台国の水天神天照大神…新たに鋳た天璽の天叢雲剣（中細銅剣、護身兼用）
火天神天鹿児山（天羽羽）…天璽の天鹿児弓・羽羽矢

◆宗像家宗女の田心姫……瑞宝十種（玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅剣、蛇の領巾など）

◆日神の天照大御神(ヒミコ)…天石窟戸前で鋳た天璽の真経津の八咫鏡(伊勢大神、三角縁神獣鏡)
豪族に配る鏡……祝いの八咫鏡(三角縁神獣鏡)　魏帝から賜る鏡…方格規矩鏡
◆素戔嗚……日矛・日鏡・玉三つ・熊の神籬など熊野家神宝、日前鏡、布都斯御魂の十握剣。
十握剣で大蛇(天照大神親子)退治。大己貴に豊葦原中つ国建て直しを妨害される。
◆高千穂宮の高皇産霊……天石窟戸前で鋳た経津御魂の十握剣、自身の神像としての天叢雲剣(中細銅剣)
経津御魂の十握剣で以て、高天原の天之国王朝と日神を守護
◆先代旧事本紀の饒速日…天神の御子と印す神璽の天鹿児弓・羽羽矢、
天璽の瑞宝十種(八握の細形銅剣、蛇の領巾・玉五つ・奥つ鏡・辺つ鏡など)
◆天日槍(五十猛)……日矛・日鏡・玉三つ・熊の神籬など熊野家神宝、奥つ鏡・辺つ鏡など瑞宝五種
◆日前の皇孫火瓊瓊杵……天神の御子と印す天鹿児弓・羽羽矢、八咫鏡(日前鏡)、天叢雲剣など三種宝物、
日隈(日前)神宝。その後、天叢雲剣・日前(日前)神宝をヒミコに返上
◆日高見国の天孫天火明…笠縫邑で鋳た伊勢大神複製の天照大神之御魂(天火明命)・天叢雲剣複製の剣、
天神の御子と印す天鹿児弓・羽羽矢
◆日本朝の火明饒速日……神璽の十握剣二振り(布都斯御魂、経津御魂)、
鏡作郷で鋳た神璽の天照御魂神(天照国照彦火明命、鏡作神社ご神体)
天神天照国照彦火明…天神の御子と印す天璽の天鹿児弓・羽羽矢、天璽の瑞宝十種
日本大物主大神、素戔嗚の孫で火雷の御歳神…丹塗矢　日枝山・松尾山に坐す大山咋…鳴鏑(丹塗矢?)
◆日前の火火出見……天神の御子と印す天鹿児弓・羽羽矢、日前鏡
◆紀伊熊野家(五十猛)……日矛・玉三つ・熊の神籬など熊野家神宝
◆和の磐余彦……天神の御子と印す天鹿児弓・羽羽矢、仲哀から奪った布都斯魂の十握剣及び
日矛など日前神宝　戦死者を弔う八咫鏡…葬送用八咫鏡(三角縁神獣鏡)
◆日本武尊……伊勢神宮で倭姫から賜る天照大神御霊の天叢雲剣→駿河国焼津で高皇産霊御魂の草
薙剣に改名→陸奥で刃に血塗らずして日高見の蝦夷を帰服→熱田神宮の熱田大神
◆大和朝廷の神武(磐余彦)…笠縫邑で新たに鋳た神璽の鏡剣(伊勢大神複製の伊勢御神及び草薙剣複製の神剣)
物部氏……磐余彦から経津御魂の十握剣・瑞宝十種を授かり、大和朝廷と磐余彦火火出見を守護

◇祭器の変遷

鉄剣十握剣　倭奴国王朝草創期　六代天神　大乱　安河誓約　大蛇退治　仲哀の熊襲征伐

布都斯魂剣　天常立→国常立→天(厳)之尾羽張→伊弉諾→素戔嗚→　日神→　ヒミコ→火明饒速日

(倭奴国王朝守護の剣)　北九州　黄泉国　高千穂　新羅・出雲　高千穂　大倭　大倭

天(伊都)之尾羽張剣　高天守護の剣　天羽羽斬剣　日本朝守護の剣

熊襲征伐に従軍　神武東征　石上布都之魂神社に奉納　崇神期

↓(大神)武甕雷→　磐余彦→　吉備の神部→　石上神宮

大倭・北九州　北九州～熊野　吉備　大和

神功軍に寝返り　天照大神御魂　布都斯魂剣

葦原中つ国の平定　高皇産霊帰国・日神の畿内遷座　東征軍北上阻止を下命

鉄剣十握剣　日神→高皇産霊→武甕槌→日神→高皇産霊→天照大神→ヒミコ→　火明饒速日→　高倉下→

布都御魂剣　高千穂　出雲　高千穂　大倭　大倭　大倭　熊野

(高千穂宮で新造高天守護の剣)　高皇産霊神像　布都御魂　高皇産霊・天照大神御魂　日本朝守護の剣

高倉下寝返り　熊野北上　磯城侵攻　日本打倒　饒速日帰順　神武即位・大和朝廷の成立

↓(大神)武甕雷→　磐余彦→　物部氏→　石上神宮

那智・熊野　熊野　大倭　大和

布都御魂　高皇産霊・天照大神御魂　大和

中細銅剣　天璽　オロチ退治　天之国王朝　天孫降臨　天(厳)王朝　倭姫による祭祀　東国征伐　高皇産霊神像　高皇産霊・天照大神御魂　高皇産霊御魂　高皇産霊御魂

天叢雲剣　天照大神→素戔嗚→　日神→　火瓊瓊杵　→ヒミコ　→伊勢神宮の倭姫→日本武→宮ス姫→熱田神宮　天照大神御霊

(天照大神の天璽)　大倭/出雲　出雲　高千穂　南九州　大倭/笠縫邑　伊勢　東国　尾張　草薙剣

銅鏡　新羅出奔　天日槍来襲　国譲り　天孫降臨　神武東征　日前再興

日前鏡
（日前再興の印）

日神→素戔嗚→天日槍→大己貴→日神→火瓊瓊杵→火火出見→磐余彦→日前神宮

高千穂　新羅　播磨　出雲　高千穂　南九州　南九州　日向/紀伊　紀伊

日の像の鏡　仮の日神御魂　日前鏡

新羅出奔　天日槍来襲　国譲り　天孫降臨　紀伊で熊野家再興

日矛
（日隈神宝・熊野家神宝・日前神宝）

日神→素戔嗚→天日槍→大己貴→日神→火瓊瓊杵→ヒミコ→天日槍→

高千穂　新羅　播磨　出雲　高千穂　高千穂/南九州　大倭　紀伊秋月

日矛（熊野櫛御気野神像）　広矛（熊野家神宝？）　日矛など日隈神宝　熊野家神宝

熊襲征伐　神武東征　新羅征伐　神武東征　日前（日隈）再興

仲哀→磐余彦→神功→磐余彦→神功→国懸神社

紀伊/橿日　橿日　新羅　紀伊　熊野　紀伊秋月

熊野家神宝　日前神宝　日前神宝　日前神宝　国懸大神（日矛鏡）

天鹿児弓・羽羽矢
（天鹿児山の天璽、火天神の御子の印し）

大倭降臨

日神→饒速日……大和白庭山の墓に埋納

高千穂　日向/大倭

葦原中つ国に派遣、復命せず

日神→天稚彦

天孫降臨　和王朝　神武東征/日本打倒/大和朝廷樹立

日神→火瓊瓊杵→火火出見→磐余彦……メスリ山古墳に埋納？

高千穂　南九州　南九州　日向/大倭

天（厳）王朝　日本王朝

互いに羽羽矢を見せ合い火天神の御子と悟る

日神→天火明？→ヒミコ→火明饒速日……垂仁陵（宝来山古墳）に埋納？

日神→日子坐王？……火雷〔大山咋末裔か賀茂龍神（闇龗）末裔〕？

日高見国の変遷

大倭日高見国① 二二〇年代前半～二二〇年代末（纒向地区）

東都の日高見国② 二二〇年代末～二四〇年代後半（千葉県市原市惣社）

常陸信太の日高見国③ 二四〇年代後半～

陸奥仙台宮の日高見国④→三〇〇年頃、帰順

日本武尊の日高見国征伐

邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝→天（厳）之国王朝（倭）→日本朝に発展）

景行・仲哀の熊襲征伐

→二八〇年前後、景行は囚われ、仲哀は敗退

天照大御神　高千穂宮①　宮崎県高千穂町　一八〇年代後半～二二〇年代前半

火瓊瓊杵　宮の宇都(高千穂宮)高原町　二二〇年代前半

→笠沙宮→西都(西都市妻)→高城千台宮(薩摩川内市)に遷都

火火出見　高千穂宮②　都城市都島　二五〇年代前半～二七〇年代前半

高千穂宮③　霧島市隼人町　二七〇年代前半～二八〇年代前半

磐余彦　高千穂宮④　宮崎市神宮　二八〇年代前半～二八〇年代中頃

《**著者紹介**》
昭和十八年、神戸市に生まれる。昭和四十三年、神戸大学工学部建築学科卒
一級建築士。平成元年三月（吉野ヶ里遺跡発表の一週間前）以来、
三十余年来の古代史研究家。

《**著書**》
『新ヤマト・出雲、邪馬台の三国志』（平成六年、新人物往来社刊）
《**電子書籍**》（**book☆walker**、楽天**kobo**、ﾊﾟﾌﾞｰ**puboo**、ｱﾏｿﾞﾝ**kindle**）
『邪馬台三国志』歴史物語編、『邪馬台三国志』
『邪馬台三国志』ダイジェスト版、『邪馬台三国志』解説編
『ヤマト・出雲、邪馬台の三国志』復刻版

令和六年五月吉日　電子書籍改訂版発行

『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ

著　者　高田康利
編集者　高田康利
電子書籍
企画・校正　高田康利

『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ

著　　高田康利

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社